

インターネットラジオ局がつくる“読む”ラジオ

AWAPURADIO

アワプラジオ通信

2016.11

アワプラジオ通信は千代田区社会福祉協議会（東京・九段下）の中にあるちよだボランティアセンターに置かせていただいています。また、アワプラジオやメンバーがかかわるイベント等でも配布しています。バックナンバーがウェブサイト上でダウンロードできます。置き場を提供してくださる方も随時募集しています。発送を希望される方もお気軽にご連絡ください（連絡先は裏面）。

<アワプラジオとは> 認定 NPO 法人 OurPlanet-TV で出会った仲間間で、2009 年に開局したミニFM、インターネットラジオ局です。名称は OurPlanet-TV の略称であるアワプラにちなんでいます（アワプラとは別々の団体です）。

『Abe's VIEW』 Vol. 23 「幸福のベンチを熊本から東京へ！」

私が仕事をしている東京の社会福祉法人福田会（ふくでんかい）には高齢者施設や児童養護施設、福祉型障害児施設などがあります。まだ老朽化した建物の改築を終えて時間が経っていません。併せて整備を進めた園庭には入居する高齢者の方が出てこられても、ゆっくりとどまっていたく場所がなく、安全でできるだけ値段も手頃なガーデンベンチが欲しいと考えたことが始まりでした。

とはいうものの、欲しいから何でもかんでも買えるほど、財政的に豊かならいいのですが、そういうわけにはいきません。そこにはしっかりした理由や裏付けも必要になります。そんなあるとき、もともと東京で、児童養護にかかわってこられ、熊本県内で障がいのある方たちが就労する事業所の所長だった前田信一さんから、ご自身の事業所が4月の地震の影響で再開を断念したことや、それでも新たに震災に遭った子どもたちや社会的養護が必要な子どもたちにかかわる取り組みを行うため NPO 法人設立をめざしていることを聞きました。

東京から何かできることはないか。そう考えたときひらめいたのが、ベンチを熊本へ発注することで、地元の福祉の現場や産業をささやかでも応援することにつながれないかということでした。そこで前田さんの事業所の利用者だった方たちの移籍先である県内大津町の NPO 法人障がい者支援の会すまいる（すまいる工房）へ製作を依頼するため、東京から熊本を訪問。インターネットの仕組みを使って資金を募るクラウドファンディングの企画をスタートさせました。

すまいる工房では木工や溶接に精通した方を含む指導員さんたち、障がいのある利用者の方たち、地元の職人さんたちといった人々が連携して、木工製品等々を製作・販売しています。ぜひご支援というかたちで、このプロジェクトメンバーに加わってください。期間は11月16日まで。よろしく願いいたします。（阿部浩一）

●プロジェクト「児童養護施設と高齢者施設を繋ぐ幸福のベンチを熊本から東京へ！」のページはこちら

https://readyfor.jp/projects/smile_kumamoto

ヨムヨム旅行記 オーロラを探して（アイスランド）



それはほんの10分くらいの出来事だった。

24時間営業のスーパーマーケットの駐車場。雲の切れ間を見つけて車を停めた。高校生くらいの男の子が数人、ジュースやお菓子を持って店から出てくる。時間は午前1時過ぎ、どこの国でも（晩夏にコートが必要なほど寒い国でも）男の子は夜中に集まるのだなと微笑ましく思った。そしてその数分後、黒い空に白い影がうっすらと浮かび始めた。それはすぐに黄緑に色を変え、雲とは明らかに違う、縦方向に形を変え始めた。オーロラなのか確信が持てず私は後ろを振り返った。なぜなら煌々と輝く満月がまだそこにあったからだ。駐車場の灯りも昼間のように明るい。それでもオーロラらしき光はくっきりと目の前に現れ始めていた。

慌てて通りを渡り視界のひらけた場所に出ると、人工灯や月光をものともしない光のマジックが、真夜中のレイキャビクの空で華やかに開催されていた。緑色のラインはまるで雲の切れ間から太陽の陽が差し込んだかのように流れ込み、そこだけが漆黒の空に神々しく光りを帯びて別格の美しさと存在感を放っていた。カメラの準備をする間にも緑色の光はどんどん姿を変えていく。最初は波打つようにたなびき、机に置いたリングのように丸くなり、そして風にさらわれるように儚く揺れながら闇に溶け込んで消えた。その時間僅か10分ほど。

興奮と脱力感が同時に押し寄せ、胸はドキドキしているのに言葉が出ない。あれだよな？ 本物だったよね？ 私たち本当に見たんだよな？ 何度も相方と確かめ合うとようやく感動が身体中に溢れた。帰りの車の中で夢中で感想を言い合い、感動が消えないよう言葉で胸に刻み込んだ。それほど淡く儚く、夢を見ているような体験だった。

来るときは寒くて冷え切っていた顔も手も足も、帰りはすっかり紅潮して寒さすら感じなかった。だけどそんな私たちの興奮を余所にレイキャビクの街はとても静かで、オーロラがこの地にとって特別なものではないことを物語っていた。（浅香友里）

世界一キレイなあなたに (2016年・アメリカ/イギリス) テア・シャーロック監督



一つの出会から始まる永遠の物語。31歳のウィルはイケメンで実業家としても成功をおさめ、まさに人生絶好調という最中に事故に遭い車椅子生活となる。恋人も親友にとられ、すっかりひねくれてしまったウィル。そのウィルを介護することになるルイーザことルーは26歳の明るく前向きで行動力あふれるドジっ子。

二人のぶつかり合いから身分の違いや障害など王道ラブストーリーの要素がたくさん。かたや事故により可能性を断たれた金持ちのウィルと、一方で父親が失業中で家族を支えるため自分の夢に踏みだせないルー。次第に若く可能性にあふれたルーの力になるとうとするウィルだが、結局いろいろな問題を解決するのは「お金」というところが切ない。

「落ち着くな。人生を果敢に生きろ」というウィルの言葉がとても力強い。挫折を味わい「一度の人生をフルに活用すべきだ」という答えにたどりついた彼の重大な決断とは……。この決断に対する評価は分かれるところだが、苦しみは本人にしかわからない。生きること、自分で選ぶこと。かつてスペイン映画「海を飛ぶ夢」でも描かれたように生死への問題を私たちに問いかける。

それにしてもイギリス人のユーモアセンスはすばらしい。皮肉を交えて言い返すやりとりが見ていてじれったい。そしてルーのファッションも見所。奇抜なコーディネイトからデートでの上品な服装まで……。ルーのキュートな笑顔とともに必見。

(宮内華子)

『GREEN BOOKS』 ~本の紹介~

緊張をとる

(2015年7月) 伊藤丈恭 著 芸術新聞社・1944円



本書は、プレゼンが苦手で緊張してしまう若手社員の“男”が、元大物女優で現在は小さなバーを営んでいる“ママ”の教えにより3か月後のプレゼン大会の成功を目指すストーリー仕立てで、緊張をとる方法を説明している。そしてほぼ登場人物のセリフで構成される台本形式だ。

身体的なものでは、ジブリッシュ(外国語風のでたらめ言葉をしゃべる)や音楽に合わせて体を動かすことで楽しむ回路を強化し緊張しにくくしていくアプローチや、その場で緊張をとる即効性のある力みを抜くためのエクササイズが紹介されている。精神的なものでは、ポジティブさとネガティブさの使い方、完璧主義にならない方法についてなどもビジネス書とはまた違ったきめ細やかさで語られている。

完璧主義などの考え方を見直し、習慣的に自分にかけているプレッシャーを取り除くことは、ものごとを達成するために正しい方法で努力することにつながるのだと思った。心は自分で直接どうにかできる

ものではないので、望む状態にするためには「誘導」する必要がある、そのために身体的アプローチなどで「外堀から埋める」のだという。本書に書かれた演劇の世界の知恵は、仕事や生活で自分の心や行動を意図した方向に持っていくために広く応用できる。(大森周子)

宮本常一と写真

(2014年2月) 石川直樹、須藤 功、赤城耕一、畑中章宏 著 平凡社(コロナ・ブックス)・1728円



とても気にはなるけれど、長年にわたる活動やその膨大な成果物を前にただただ立ち尽くすばかり。やみくもに手を出そうものなら、消化不良を起こしてその断片もしっかりつかめない。それでもやっぱり、何か自分が引き付けてやまない。民族学者の宮本常一は私にとってまさにそのような存在だ。

宮本は1907年(明治40年)に山口県周防大島で生まれ、1930年代頃から81年に亡くなるまで、各地を訪ね歩き、直接人々から話を聞くことで多くの記録を残した。日の当たる歴史ではない、日本人の暮らしや生業についての著作や講演記録などの“言葉”を残した一方で宮本は、訪ねた先で10万枚以上ともいわれる写真を撮った。

本書はそんな宮本常一が生涯に撮影した写真の一部に「写真を撮る民俗学者」に対する考察や著者の一人である石川直樹さんが、宮本の故郷、周防大島を訪ねた際の写真や文などで構成されている。

本書の中にもエピソードとして紹介されているが、宮本の教えを受けた者は「芸術写真を撮るな、読める写真を撮れ」と言われたそうだ。その数々の写真が単に懐古趣味的なものを超えて、どこか心をざわざわさせるのは、それが写真として残すための一瞬ではなく、まさにそこで目にしたそのままの場面だからなのだろう。もっとたくさんの宮本常一が撮った写真を“読む”ならば、『宮本常一が撮った昭和の情景 上・下巻』(毎日新聞社)もおすすめ。(阿部浩一)